

共生・公正・創造



# ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

## “「JR総連・東労組」崩壊の兆し!?”

### 「国鉄改革の裏側」ダイジェスト版 **第4回**

あの元国鉄労働課長が明かす「国鉄改革の裏側第5弾」が【「JR総連・東労組」崩壊の兆し!?”】という本になった。本紙は筆者（宗形明氏）の了解を得て、『JR東日本革マル問題の現状』をダイジェスト版として紹介することとした。



## 浦和電車区事件の引き金を引いた人物

西岡研介著『マンガロープ』（講談社）に、西岡氏の取材に応じた嶋田邦彦元JR東労組副委員長が、「浦和電車区事件を惹起させた最大の責任者は松崎氏だ」と断定的に語る場面がある。【現役時代は私も、他労組と激しく組合員の取り合いをしているなかで、JR東労組組合員が、他労組の組合員と交流すること自体、『組織破壊行為』だと信じて疑いませんでした。しかし、JR東労組を辞めて初めて、自分たちのやっていたことが世間では通用しないと知ったのです。私がJR東労組に辞任届を提出したのは、02年の10月31日のことですが、警視庁公安部が『浦和事件』を摘発したのが、その翌日の11月1日。これは単なる偶然に過ぎないのですが、松崎は、私や、私と一緒に辞任届を提出したほかの幹部が、『警察と繋がっている』、『権力の手先だ』などと、何の根拠もなく喧伝しはじめたのです。そもそも（逮捕・起訴された）7人が、Y氏を退職にまで追い込んだのは、松崎の“指示”があったからこそ。もっとも彼は巧妙ですから、直接的な指示は出しません。しかし、松崎から『積極攻撃型組織防衛論』を叩き込まれている“松崎チルドレン”は、彼の言葉を積極的に解釈し、それを忠実に実行する。だから松崎は、わが身を守るために、7人の『冤罪』を必死で唱え続けているのです】

このことを裏付ける東労組本部の重要な「内部指導文書」があるので次に紹介しておく。

【ところで我がJR東労組が何ゆえに「世界最強の労働組合であるか」という理論的大きな根拠は、世界で唯一「統一と団結論」を乗り越えていることにある。動労が国労との対比において国鉄改革時において「分割・民営反対」から「推進」の方針転換がはかることが出来た組織的根拠は内容上において一枚岩だったからである。動労内部に札幌に見られる日本共産党系の全動労や中核派系の千葉動労が存在したならば転換は容易には貫徹できず、国労のようになっていたであろう。つまり労働者階級の「敵」を組織外に放逐し、内容上の一枚岩であったからである。さらに我々は「リーダー研修」も粉砕したのであるが、95年の組織分裂以前にこの「リーダー研修」という攻撃が加えられたならば、闘いは困難を極めたであろう。つまり、労働組合のリーダーが真の労働者階級として確立され、反対派が存在しない「真の一枚岩の団結」が様々な困難を克服できた組織的根拠なのである。そして、その理論的根拠が「統一と団結論批判」なのである。】

私はこの役員教育・指導用の東労組内部資料を極めて重要な文書だと考えている。動労中央執行部の派閥構成変遷で、「革マル+政研派」が過半数を制し、動労本部の権力奪取に成功するや否や、次の役員改選では、それまで多数派だった労運研派を一挙に本部から放逐してしまった理由が、そして「異論排除」、「鉄の統制」は松崎氏率いるJR革マル派の“正しい組織運営手法”、基本方政策であり、彼らにとって“必須”“正義”の行動なのだ、ということがよく判ると思う。内部に異論があったのでは、セクト型労組運営は成り立たない。それにしても、JR東労組が「世界最強の労働組合」とは笑わせてくれる。自画自賛もここまでくれば一級の“芸術品”で、もう笑う、いや嗤うしかない。

【JR総連・東労組」崩壊の兆し!?”(高木書房)P.67~P.76】